大賞　創価女子短期大学　国際ビジネス学科

「児童虐待で苦しむ親子を救うための『児童相談所虐待対応ダイヤル189』の普及活動」

指導教員：教授／学長　水元 昇 氏

■取り組み内容について

――今回学生さんが取り組んだテーマが「児童虐待」ということで、大変難しい問題を取り上げられましたね。

そうなんです。まず当ゼミでは女性の感性を活かしたビジネスプランを考え、その実現をチームで目指す活動をしています。少し視野を広げ、社会的な課題解決に挑むソーシャルビジネスの取り組みも可としています。今回大賞を受賞したチームが持ち寄ったテーマが「児童虐待」でした。学生の立場で取り組むには大変難しい問題ですので、思わず「本当にこのテーマで大丈夫?女性の視点で取り組んで、とは言ってきたけど、女子学生の立場では理解が難しい、母親やその家族を取り巻く出口が見えない問題だよ。単なる使命感だけで臨んでも成し遂げられるわけじゃないから、本当によく考えてみて」と差し戻したくらいです。

――そもそも、なぜこのチームは「児童虐待」というテーマを選んだのでしょうか?

当ゼミでは2年生の4月にチーム決めをするのですが、「児童虐待」をテーマに選んだ3人には共通項がありました。それは「子供や教育に興味がある」ということです。特に児童虐待に関する痛ましい事件が日々報道されており、子供や教育に関連する問題として、児童虐待を取り上げたいとなったようです。私からは「覚悟を持って臨めるか」と何度も問いました。それでも学生たちの決意は揺るがず、このテーマで進めることとなりました。

――その後、「児童相談所虐待対応ダイヤル189（いちはやく）」の認知度向上を目指したということですが、そこまでの経緯を教えてください。

いくら問題意識があっても、実際に現場で何が起きているかは分かりません。ですから学生たちは、専門家によるオンラインセミナーに参加したり、児童養護施設の方から話を聞くなど、知識を得るところから始めました。知識は深まっていきましたが、それに比例して「自分たちはこの問題にどうアプローチできるだろう」と悩みも大きくなっていったようです。手探りを続ける中、チームの一人が1つのアイディアを提示しました。その学生は福岡県出身で、「地元のバスでは、何かしらのメッセージを告げる車内アナウンスが日常的にかかっていて、繰り返し聞くことで耳に残る。また宣伝効果も非常に高いというデータもある。だからバスのアナウンスはどうか」というものです。他の学生も賛成し、ようやく目指す方向が見えてきました。アナウンスする題材を探す中、学生たちは「児童相談所虐待対応ダイヤル189（いちはやく）」を知ります。家庭内、あるいは近所で「これは虐待かもしれない」と感づいたときに、児童相談所に通告や相談ができる通話サービスです。調べていくと、この189は認知度が低く、当然学生もその存在を知りませんでした。その時点では一つの候補ではありましたが、「この189をバスアナウンスで広めていくのはどうか」というところまで話が及びました。

――それで、バスアナウンスに向け動き出すわけですね。

そうなればよかったのですが、この計画は途中で行き詰ってしまいます。学生たちがあるバス会社に話を持ち掛けたところ、「できません」とけんもほろろに断られてしまいました。次いで、当校がある八王子市が運行するローカルバス「はちバス」ならどうかと、八王子市の職員とやり取りを重ねます。ですが、突然告げられた結果に学生たちは愕然としてしまいます。「はちバス」には音声を再生する機材が積まれていない、というのです。

――進展していた計画が頓挫してしまったのですね。学生さんも落ち込んだでしょうね。

活動スタートから約半年が経っていたこともあり、相当ショックを受けていました。ですが、「宣伝する」ことから派生して、「動画を作成し、CMとして発信する」というアイディアも実は持っていました。私からも「動画作成に注力しては」とアドバイスし、学生たちも気持ちを切り替えていきます。189について調べていくと、認知度以外にも課題があることに気付きます。今は改善されていますが、以前まで音声ガイダンスが長く、児童相談所の担当者に繋がるまで平均70秒かかっていました。担当者に繋がる前に電話を切ってしまう人が89%に及び、学生たちは活用度にも課題があることを突き止めます。

――70秒もかかっていたら、せっかく意を決して電話をかけても途中で切ってしまいますよね。

それが2016年には30秒にまで短縮されました。ただ、短縮されたことを知らない人も多いのではないか。また、電話をかけた後の流れがイメージできず、電話をかけること自体に躊躇する人も多いのではないか、と学生たちは仮定しました。そこから、「音声アナウンスが30秒に短縮されたこと」「どのようなアナウンスが流れるかがイメージできること」の2点に絞って伝える動画にしようということで、まとまっていきました。

――そして動画ができたわけですね。

そうです。ロングバージョンとショートバージョンの2本を作ってきました。先述の2点が表現され、かつ切実感やインパクトがあり、いい出来栄えだと感心しました。その後、八王子地域で産学公連携事業を担う団体が主催するプレゼン大会において、この動画作成に向けた取り組みは準優秀賞を獲得。八王子市のホームページに動画を掲載していただくことができました。

「児童相談所虐待対応ダイヤル189（いちはやく）」の普及に向け学生が作成した動画
https://www.youtube.com/watch?v=G0ZyU_Qmh48

■大賞受賞よりも嬉しかったこと

年が明け、2月に開催される社会人基礎力育成グランプリの予選大会に向け学生たちは準備を進めていきました。2月は卒業論文発表会もあり、学業も多忙を極める時期。それでも学生たちは手を緩めず、卒論制作の合間を縫って自分たちのホームページを作成するなどして、動画の普及に努めます。動画の内容は、児童虐待防止に取り組むNPO法人など主要団体からも高く評価され、団体のホームページにリンクを掲載いただくなど、少しずつですが動画を見てもらえる場が広がっていきました。そして、そうした実績を携えて出場した社会人基礎力育成グランプリでは、予選大会で最優秀賞、3月の決勝大会では全国一位となる大賞をいただくことができました。

――大賞受賞は学生さんの大きな励みになったのではないですか？

もちろんそうなのですが、グランプリの感想を聞いたところ、返ってきたのはこんな答えでした。「他のチームのプレゼンがすごくて、私たちのプレゼンがどうだったのか、正直わかりません。でも一つ言えるのは、『やり切れた』ということです。虐待問題の深刻さ。それに対して何かできないかと私たちが考えてきたこと、言いたかったことが全部伝えられたと思います。それが何よりの喜びです」。振り返れば、コロナの影響で活動に制約が生じたことも相まって、学生たちはどの時点でも悩み、迷い、試行錯誤してきました。それでも「この問題について何か伝えたい」と強く思い続けてきたからこそ、最後までぶれずに活動を続けてこられました。

――それが「やり切れた」の一言に集約されたわけですね。

はい。今回はありがたいことに大賞という結果が伴いましたが、それ以上に「やり切れた」こと。それが学生たちの大きな財産になったと思います。

▲社会人基礎力大賞を受賞した学生たち